
バカと恋愛とAクラス

まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと恋愛とAクラス

【Nコード】

N1463Z

【作者名】

まり

【あらすじ】

バカテス二次創作です 振り分け試験の時に倒れて退席扱いになった女の子を助ける明久 その行為が認められたのか明久がAクラスに！ 超鈍感な明久がおくる学園恋愛ストーリー

振り分け試験

振り分け試験時

ガタっ バタンっ

明久「っ！大丈夫っ！？」

教官「退席すると無得点扱いになるが、それでもいいかね？」

明久「そんなっ 体調不良で席をはずすだけで……（あっ そうだ）

先生 『僕は』退席します」

教官「そうか なら他の生徒の邪魔にならないように早く教室から
でるんだな」

明久「よつと じゃあ失礼します」

ガラガラ ピシヤ

（とりあえずこの娘を保険室に移動させて……）

？「あのっ すいません私のせいで、あなたまで巻き込んでしまっ
て……」

明久「気にしないで それより今、最後の総合試験だけど名前、書
いてあるよね？」

？「？ はい 書いてありますけど」

明久「そう（ニヤリ）なら僕に任せてよ」
？「????？」

倒れた娘を保険室につれていった後

ガチャッ 「失礼します」

学長「おや？いまは試験中の筈だが？」

明久「そのことについてお話にきました」

学長「なんだい？」

明久「僕は退席しましたが一緒に教室からでた娘は今、テスト用紙に書いてあるぶんだけで採点してほしいんです」

学長「却下さね 退席は無得点扱いにするのが規則さ」

明久「でしょうね ……でも

今からそれを覆してやる」

沈黙…

明久「えっ ちょっとは反応してくださいよ」

学長「いや、だから規則は規則だし覆すなんてムリさね」

明久「やってみせますんで聞いてからでも……」

学長「わかったわかった 早く話しな」

明久「では…… 実はあの娘は退席していません」

学長「自分が勝手に連れてった とでも言う気かい？ それでもだめさね 理由はどうあれ教室からでた時点で退席さ」

明久「バカなっ！ 考えが読まれた！」

学長「バカだね 誰でもわかるよ それだけなら帰りな」

誰にでも分かるだと？ バカな！？ これしか方法がなかったのに！

学長「“観察処分者”らしいバカ度だね 西村先生も苦勞するよ」

何も此処で観察処分者っていわなくて……

カンサツシヨブンシヤ？

明久「それだっ！」

学長「（ビクッ）なっなにさね！」

明久「学園長は召喚獣制度を作った本人ですよ？ まだ改良するつもりはありますか？」

学長「いきなりさね……まあ改良できることがあるならするが……」

明久「なら観察処分者の僕が手伝います」

学長「……！ 続けるさね」

明久「観察処分者の召喚獣は他の召喚獣とは違う なら実験台にするには一番な筈です」

学長「それと退席扱いの取り消しで交渉しようってことかい？」

明久「はい」

学長「

……交渉成立」

……っへ？

明久「マジですか!？」

学長「ああ そのかわりコキ使うよ？」

明久「ありがとうございます」

学長「用はそれだけなんだろ？ さっさと帰りな」

明久「はいっ！ 失礼します!」

ガチャッ バタンっ

(いよっしややああああ!?!?!?)

ヤバイ!なんかめっちゃ良いことしたよ!?!?すぐくね!?!?ああなんかいい夢見れそ……

ちなみに僕もついでに退席を取り消してもらったのを家に帰ってから気づきました

プロローグ(前書き)

前回はつとーこー

今回にかいめー

まだまだ恋愛にはなりません

プロローグ

僕が文月学園に入学して二度めの春がきた　……が正直感慨深くもない　今頭にあるのは、今年一年戦い抜くための戦友がいる場所　――ークラスが気になっていた

鉄「吉井！？おはよう」

明「なんで驚くんですか！？」

鉄「いやっ　お前がこんなに早く来るなんて思わなかったからな　つい……」

明「ああ大丈夫です　昨日ベタに眠れなかったんです　おかげで朝食はバッチリです！」

鉄「その言葉には生命の危機が感じられるが……」

明「えっ？　そうですか？」

鉄「……（たまにコイツの常識がわからん）」

明「????？」

何を鉄人は考えてるんだ？

明「鉄人　それより早く振り分け試験の結果をグツファあああああ　ああ！」

鉄「さりげなく鉄人と呼ぶな！　西村先生だ！」

明「だからって本気で殴ることは……」

鉄「んっ？　まだ七割だが？」

明「（ガタガタガタガタ）」

鉄「まあいい ほら受け取れ」

明「あっありがとう……」……ぞいます」

コイツ……やっぱり鬼だ それはさておき振り分け試験の結果を受け取る

鉄「吉井、一ついっておく 学園長にまで掛け合ったそうだが、それは学園的には異例で正しくはないことだ」

明「……すみません」

鉄「反省してるならいい しかしお前のした行為は人間的に正しい行為だ 胸を張ってもいい」

明「……！」

鉄人が誉めた！？バカな！そんなことがあるのか！？

鉄「よってお前はFクラス行きのところをAクラスだ よかったな」

はい？

いまなんて？

ブログ（後書き）

短い……

つてことで毎日三回更新を予定しております
多分もっと書けると思うけどとりあえず……

感想まっています

設定（前書き）

明久・オリキャラ設定

まあこんなもんでしょうか？

設定

吉井明久

2年Aクラス

観察処分者

総合点 700～900

得意科目 日本史・世界史(100～150)

苦手科目 全て

原作と違う点

- ・ 姫路に好意をもっていない
- ・ キレルたまにある
- ・ 頭がよくなる

オリキャラ

洲上院 紬 (すじょういん つむぎ)

2年Aクラス

総合点 2500～3000

得意科目 英語・数学
苦手科目 日本史・世界史

容姿

家庭教師ヒットマンリボンの十年後ラル・ミルチの目が優しくな
った感じ

胸はEカップ

召喚獣

白いドレスに連射式アームガン（腕に装着するタイプ）

弾一発につき一点消費

腕輪の能力

ホーミング

弾一発につき十点消費して誘導弾を撃つ

振り分け試験の時に助けてくれた明久のことを想っている 明久と
話すとき顔が赤くなりショートするときがある 翔子や愛子、優子
には想い人がバレーしていて後をおしてもらっている

設定（後書き）

短いけど一日三話更新改め、長いのを一回更新します

今後ともよろしくお願いします

いざAクラス？（前書き）

今回優子との会話だけに……

すいません

いざAクラス？

明「うわー ここがAクラスかー 最新式パソコンに個人空調機、個人冷蔵庫まで…… 教室っていうよりむしろホテルっていうような気が……」

Aクラスの教室の前で窓ガラス越しにAクラスをのぞき込む 端から観たら覗きをしている変態にしか見えないが……

？「ちよつと！ そこでなにしてるの!？」

明「うわあっ!?! すいませんごめんなさい 許してくださいって…… 秀吉？」

優「私をあんな愚弟といっしょにしないで！ わたしは双子の姉、木下優子よ!」

明「木下優子さん？ そういえば秀吉にお姉さんがいるってー」
優「そ・れ・よ・り!」

明久の言葉を遮って優子は疑問を聞き出した

優「なんでAクラスを覗いてたわけ？ 観察処分者の吉井君？」

明「えっ？ えつと…… 実は僕A「嘘ね」クラスにって最後まで言わせて！ しかも嘘ってひどくない!？」

優「どうせ嘘言うだろうからね 先に潰しておこうと思って」
明「……」

優「どうせAクラスの設備を見に来たんでしょーけど、それより先に自分のクラスにいったらどうかしら？ 覗きをしている変態にしかみえなかつたわよ？」

明「……」

優「吉井君はどうせバカの巣窟のFクラスでしょ？ 努力もしない

のにAクラスの設備を見て羨ましがるなんて…… この設備は努力した人「うるさい!!!」たちのみ……え?」

明「聞いてれば上から目線にしか話さない、人の話を最後まで聞かない、嘘だという 何様のつもりなの? 自分が優等生なら自分より下の人を侮辱するの? それこそバカのすることだね」

優「なっ……!」

明「別に覗いてたことは否定しない 僕がバカでどうせFクラスだと思つのも仕方がない ……けどそれは人を侮辱する理由にはならない」

優「くっ……! 何よ観察処分者の癖に! 私はあなたより真面目で正しい行為をしてきた優等生よ!」

明「じゃあ不真面目で間違つた行為をしてきた観察処分者の僕と同じクラスだと知つたら?」

優「そんなことあるわけー」

ピラッ

僕は言い終わる前に自分の所属するクラスが書いてある紙をみせた

優「ー!?!?」

明「人の上にたつことは人の模範になることじゃないの?」

優「!?!?!?!? そうね」

明「だつたら……一緒に頑張ろうよ」

優「……ええ ごめんなさい 私ムキになっちゃった」

明「あはは それはお互い様だよ 僕の方こそごめんね」

優「でも、謎が一つできたわ」

明「謎?」

優「ええ なんで吉井君はAクラスなの?」

ああ 謎ってそれね

明「えっとね それは……」
優「（ズイツ）それは？」

いきなり近づくかないで！ 木下さん綺麗だからドキドキするんですけど！ 顔も赤く……あっ離れてった なんか嬉しいやら悲しいやら

優「早く教えてよ」
明「それは

……僕にもわかりません！」

……沈黙

優「（スタスタ ガチャ バタン）」
明「ちよっ!? スルーはなしで! スルーは無しでおねがいしま
すっううううづづづづづ!!!」

いざAクラス？（後書き）

会話面倒ですが呼んでくれた方、ありがとうございます

次はAクラスで自己紹介させます　そこで明久がAクラスな理由も

Aクラスの理由（前書き）

結構書いたと思います

こんな感じでどうですか？

Aクラスの理由

木下さんにスルーされたので僕も教室に入り席に座りました

ガチャ バタン

高「皆さん進級おめでとうございます 私はこの2年Aクラスの担任、高橋洋子です よろしくおねがいします」

先生が来たみたいです

えっ？いきなりすぎる？作者さぼんな？

作「すみません」

高「ー設備に不備のある方はいますか？」

これであるっていうほづがおかしいでしょ

高「それでは自己紹介をしてもらいます 代表の霧島さんからどうぞ」

霧「……霧島です」

短っ！

高「次からは廊下側から順におねがいします」

.....

Aクラス生徒「ーです よろしく」

次僕だ

高「次、吉井君お願いします」

明「はい 吉井明久です 気軽にダーリンってよんでください」

シーン.....

.....寂しくなんかないからね！

Aクラス生徒「吉井って確か観察処分者だったよな？ なんでAクラスにいるんだ？」

明「僕にもわかりません」

シーン

痛い！みんなの視線が痛い！

高「吉井君がAクラスにいる理由は最後に話します」

先生！ナイスフォロー！

高「といっても次の方が最後なんですけどね」

前言撤回 今の一言はいららないです

高「それでは最後の方……あれ？ いませんね どうしー」「遅れてすみません！」あつ来たようですね」

遅れて来たのは女の子だった ……あれ？ あの娘どこかであったような気が？

高「自己紹介中でしたのでお願いします」

洲「はい 洲上院絢です よろしくおねがいします」

高「洲上院さんは吉井君の後ろの席に……いえ ついでですので吉井君がAクラスにいる理由をお話します」

あつ やつとわかるみたい

高「実は吉井君は、この洲上院さんが振り分け試験の時に倒れたのを助けて、学園長に退席無得点扱いを取り消してもらったように説得したんです」

ほえ？ 助けた？ そんなことー

ーしてたね

高「その行為について職員全員で検討したところ吉井君をAクラス

にすることになりました」

Aクラス生徒「それだけでAクラス入りですか？　なんかずるいで
す」

失敬な！ずるいとはなんだ！　……いやずるいな　かなりずるいと思
う

高「吉井君は観察処分者になるほどのバカです」
明「ヒドいっ！……！」

高「ですがそんな吉井君が人助けなんてするとは思えません　吉井
君はバカで単純で周りに流されやすいです　今までの行為は周りに
流されたからだと推測します」

確かに雄二に騙されっぱなしだったかも

高「なら周りが優秀なAクラスなら吉井君もまともになる筈です」

おお！　なるほど！

高「多分……」

えっ？　信用無い？

高「よって吉井君はAクラスになりました」

……

あれ？みんな納得いつてない？

高「それだけでみんなが納得できないのもわかります 色々と邪魔にならないか 特に試召戦争において」

orz 否定できない自分に嘆いている

高「安心してください 吉井君は試召戦争で邪魔になりません いまから証明します 霧島さん吉井君前へできてください」

? 何をするんだろ?

高「二人には模擬試召戦争してもらいます 総合では差が大きいので…… 吉井君、得意科目はなんですか?」

明「へっ?じゃあ日本史で」

高「わかりました 承認します 試^{サモン}獣召喚してください」

「「試獣召喚《サモン》」」

Aクラス 霧島翔子

日本史 381点

VS

Aクラス 吉井明久

日本史 157点

高「では始めてください」

Aクラスの理由（後書き）

つぎは戦闘シーンです

うまく書けるかな？

Aクラスはいい人がいるみたい(前書き)

一日おいてしまいました

すいません(シヨボーン)

本編どうぞ

Aクラスはいい人がいるみたい

高「それでは始めてください」

相手は学年主席の霧島さん 点数の差が大きいけど勝算はある

明「一瞬で決める！ きなよ霧島さん」

霧「……」

霧島さんの召喚獣が日本刀を構えて突っ込んできた それに合わせて僕の召喚獣も突っ込ませる 僕の武器は木刀だから普通に斬り合えば負ける

キーン ガツ ザクツ

僕と霧島さんの召喚獣の陰が合わさった そして霧島さんの召喚獣が仰向けに倒れていて僕の召喚獣が首に木刀を突き立てていた

Aクラス全員「……えっ？」「……」

明「僕の勝ちだね」

霧「……（コクリ）」

召喚フィールドが消えて僕たちの召喚獣も消えた

Aクラス生徒「なっなんで代表が負けたんだ？ 点数は0になっ
ないの？」

高「召喚獣にも人間と同じ急所があります 吉井君はその一つの首
を狙ったんです」

ああなるほど……

Aクラスのみんなも納得したみたい

Aクラス生徒「でも、代表の方が点が高かったのにどうしてあんな状況に？」

明「それが観察処分者の唯一の利点かな？」

僕はみんなに観察処分者はフィードバックと操作技術について話して

明「霧島さんの召喚獣の刀をいなして、刀の柄の底を木刀で叩いて飛ばしたんだ」

真っ直ぐに来たものは下からの攻めには弱いからね　と補足説明

高「これで吉井君が邪魔にはならないということがわかったと思います」

それぞれがお互いの顔をみてうなずき合っている　みんなもわかってくれたみたいでよかったよ

高「以上で説明を終わります　では授業を始めましょうー」

p r r r r r r r p r r r r r r

高「はい高橋ですが………

…わかりました　FクラスがDクラスへ試召戦争を仕掛けた用です
授業は取り消して自習とします　各自自習をしてみてください」

そういつて高橋先生は教室を出ていった

僕も席に戻ろうー

洲「あのっ！」

ーーと思ったら声を掛けられた

明「ああ洲上院さん 何？」

洲「あのっ 振り分け試験の時はありがとうございました」

明「えっ？ 別にたいしたことしてないけど？」

洲「そんなことないです 学園長にまで直訴したんですよ 規則は絶対なのに……ほんとうにありがとうございます」

そういつて頭を下げる洲上院さん なんか必死な所が可愛かったり

明「どういたしまして それより体調はもう大丈夫なの？」

洲「はい おかげさまで大丈夫です」

明「そう よかった（ニコツ）」

洲（カアアアノノノノノ）「（カツコいい）」

明「？ 顔が赤いけどホントに大丈夫？」

明「（ちよつと心配だなあ 熱があるのかな？）」

そう思つて洲上院さんの額を触つてみた

洲「ひゃあ！（シュー ボンツ！ バタンツ！）」

明「ちよつ！ 洲上院さん！？ だめだ動かない とりあえず席まで運ぼう」

よいしょっ てくてく

倒れた洲上院さんを席に座らせた リクライニングシートだったからボタンを押してできるだけ横になれるようにしておいた

明「（僕が触ってから倒れたってことは僕のことを嫌いだから？）」

フツ 別にいいんだ 気にして……ないもん！

悲しみに耐えている僕の前に明るいう声がやってきた

愛「やつほー吉井君 さっきのすごかったね」

明「えっ？ えっとー？」

愛「ああ僕？ 僕は工藤愛子 一年の終わりに転校してきました 趣味は水泳と音楽鑑賞でスリーサイズは上から78・56・79で 特技はパンチラ、好きな食べ物はシュークリームだよ よろしく」

最後あたりがおかしかったような…… それにしてもなんか……

明「工藤さん 今の特技の所……」

愛「信じられない？ なら見せてもいいよ？」

そういつて彼女はスカートの端をつかんだ 正直みたいけど僕が聞きたいのはそんなことじゃー

明「そうじゃなくて何であんなこといったのになって……」

愛「だからホントに特技としてー」

明「嘘でしょ？ それ」

愛「えっ？」

明「僕には興味をもってほしい、自分を見てほしいって感じに見える」

愛「！……そんなことは」

明「一年の終わりに転校してきたって言ってたし友達も少ないんじゃない？ だからあんなこと言ったんじゃないの？」

愛「……」

明「ダメだよ 軽々しくそんなこと言ったら」

愛「……」

明「あつなんかゴメン 説教みたくなっちゃった」

愛「大丈夫 気にしてないし それに大正解だよ ホントはちょっと寂しかったんだ」

明「だつたらさ」

愛「？」

明「僕が工藤さんの友達になるよ だからさ、特技は言わないでね」

愛「へっ？」

明「嫌ならいいんだけど……」

人の言うことにとやかく言う気はなかったのに…… これで嫌われたら洲上院さんと合わせて二人に嫌われる そんなことになったら僕は……

愛「別に嫌じゃないけど…… ホントに友達になつてくれる？」

明「もちろん！」

愛「ありがとう！ これからよろしくねアッキー」

明「あつアッキー！？」

愛「愛称だよ いいよね？」

明「うん よろしくね」

僕は手を差し出した 工藤さんはちよつと赤くなってたけど手を出してくれた 二人でした握手は短かったけど友達ができたせいが長くかんじられた

明「（Aクラスにはいいひとがいるみたいだな……）」

僕はそう感慨深く思った

Aクラスはいい人がいるみたい（後書き）

今回は明久と愛子の会話が作者は好きです

つぎはこれまでのFクラスのくだりです

Fクラスでは……（前書き）

明久が翔子と戦っているときのFクラスの話です

どーぞ

Fクラスでは……

Fクラスではー

雄「明久の奴はまだ来ないのか…… 初日から遅刻かよ」

まあ明久なら仕方ないか…… たぶん目覚ましの電池が切れて起き
れなかったんだろう Fクラスは明久を入れて50人ーつまり明
久がFクラス最後の一人

雄「そして試召戦争における最大のワイルドカード あいつさえい
ればAクラスにも勝てる」

待ってやがれ翔子

雄「にしてもホント遅いな いったい何やってんだ？」

ガラガラ

福「すいません遅れました みなさん席に着いてください」

来たのは中年の頼りなさそうなオッサンだった

福「それでは廊下側の人から順に自己紹介をしてください」

秀「木下秀吉じゃ 演劇部に所属しております」

秀吉か…… あいつの演技力はすごいからな 役に立ちそうだ

康「……………土屋康太」

ムツツリーニもか 情報収集と保険体育なら誰にも負けないからな
こいつも切り札になる

島「……………趣味は吉井明久を殴ることです」

島田までいるのか 数学だけはBクラス並にあるからな 主力として使える

雄「後は明久なんだが……………まだこないのかー」

ガラガラ

雄「やっときたかバカカー」

瑞「遅れてすいません！」

なっ！ 姫路だと！？ なんて学年主席争いをしている姫路がなんでFクラスに！？

F生「質問です なんでここにいるんですか？」

聞きようによつてはかなり失礼だが俺も聞きたかったことだ

瑞「えっと 振り分け試験の時熱をだしてしまつて……………」

なるほど それで姫路はここにいるのか にしても思わぬレアカードが入ったな 姫路さえいればいくらでも戦況を変えることができる

雄「んっ？　そういえば明久がいない」

あいつはどこにいるんだ？

雄「おいっ　ムツツリーニ」

康「……………何か用？」

雄「明久がFクラスにいない　あいつは今どこにいるか調べてくれ」
康「……………了解」

そういつて何かの機材（どうせ盗聴のдарう）をイジリ始めた

康「……………わかった　明久はAクラスにいる」

雄「はあ？　あいつがAクラスに？　あの野郎…………」

一人Aクラスで幸せってかー

福「坂本君あなたが最後です」

雄「ああ　代表の坂本だ　好きなようによんでくれ」

俺はあいつの幸せがー

雄「みんなにいつておく　FクラスはAクラスに試召戦争を仕掛け
ようと思っ」

ー　大っつっつ嫌いだ！！F生「勝てるわけないだろ」

F生「これ以上設備を落とされたくない」

F生「姫路さんがいればそれでいい」

雄「いやっ　勝てる　今からそれを証明してみせる」

俺は秀吉、ムツツリーニ、島田、姫路を示し4人の強さを言った

F生「これならホントに勝てるかもー」

F生「そしたらリクライニングシートだ」

F生「姫路さん結婚してください」

雄「おまえ等には悪いが勝っても設備を入れ替えることはしない」

F生「はあ？ なんでだよ？」

雄「おまえ等にはわかってないかもしれないがここにはいるべき奴
ー 観察処分者の吉井がいない」

ザワザワザワザワ

みんな気づいたのか騒ぎだしている

雄「あいつはAクラスにいる Aクラスの女子といちゃついてな」

瑞・島「ゴゴゴゴゴ」

FFF「」「異端審問だ」「」

雄「だから勝利した時、人員トレードをしてFクラスにひきづり落
とす」

FFF「」「そしてボコボコに!!!!」「」

雄「ならばペンをとれ！ あいつにこれ以上幸福をあたえるな！」

FFF「」「うおおおおお!!!!」「」

準備はできた 明久…… 覚悟しやがれ！

そしてFクラスはDクラスに試召戦争を仕掛けた

おまけ

愛「あれ？ アッキーご飯食べないの？」

明「いやっ 実はお金がなくて……」

愛「じゃあ僕がお弁当作ってこようか？」

明「えっ！？ いいの!？」

愛「うん まかせてよ」

明「なら僕はデザートにシュークリームをつくってくるよ」

愛「それホント!? 絶対だよ！」

優「二人とも何はなしてるの？」

愛・明「ああ実はー」

優「愛子だけずるいよ 私にもつくって」

明「あはは 別にいいよ」

A男・女「何の話してんだ(るの)？」

そんな感じにAクラス全体に広がっていった最後にはみんなにプチシュークリームをつくることになった そのおかげでAクラス全員と仲良くなれました

Fクラスでは……（後書き）

明久…明 愛子…愛 優子…優 翔子…翔 洲上院…洲 雄一…雄
秀吉…秀 ムツツリー…康 島田…島 姫路…瑞

とします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1463z/>

バカと恋愛とAクラス

2011年12月9日01時54分発行